

体育同志会大阪支部と僕、そしてこれからの展望

事務局長 日名 大悟（柏原市立堅下小学校）

はじめに

深夜、再放送のNHKプロフェッショナル「エヴァンゲリオン」最終作品に取り組む庵野秀明監督のドキュメンタリーを観ていた。庵野監督は下積み時代、ジブリ作品「風の谷のナウシカ」の最後の巨神兵を任され、宮崎駿監督を唸らせたらしい。庵野監督は言った。「始めたからには、終わらせないとけない。終わらせる義務がある。」「最後は、締め切りに決定される。」

僕は、後者の言葉を聞いて安心した。僕の中で、多くの教育実践に、似たようなところがあるからだ。実践始まりのチャイム直前まで、これでいいかなと悩んで、「えい！」と開き直る感覚。庵野監督は相手がお客さんだけど、こちらは子どもだ。子どもたちの反応や感想が、待つてはくれない。次の授業を準備できる。その辺が庵野監督とはずいぶん違うから、かなりの部分を子どもたちに頼って、やっつけていける。

一方で、「終わらせちゃいけない」のが教育だ。体育同志会実践だ。「始めたからには、この体育同志会を必要とする教師がいる限り、私たちの教育実践で輝く子どもたちがいる限り、続けなくちゃいけない。」これが、決定的に違う部分だ。

多くのお客さんに多くのことを感化するのだから、それはそれで本当に大きな意味のあることは百も承知の上で言うが、庵野監督は、最終的には自己満足なのだ。

僕たち体育同志会大阪支部との大きな違いも、こうしてこのドキュメンタリーによって僕の中に示された。

学校体育研究同志会大阪支部50周年を一つの節目とした未来への提言を、若い僕が書くことになった。自分史と重ね合わせること

で、大阪支部の未来を明るく語りたい。

1. 学校体育研究同志会大阪支部へつま先を突っ込み始めた日々

初任で国分小学校へ赴任し、前田雅章さんの「サッカーのオタクがいるから、研究大会へ来ませんか？」との誘いから、学校体育研究同志会大阪支部との接点は生まれた。

全く教育技術を持ち合わせていなかった僕に、大阪支部大会で出会った船富公二さんが毎週のように堺市の喫茶店で相談にのって下さり、なんとか「じゃまじゃまサッカー」で初任研と学級崩壊の危機をのりきった。

初任2年目の秋、男子更衣室で前田さんに声をかけられた。

「中村敏雄著作集の輪読会をするんですが、日名さんも参加しませんか？」

「行きます。」

サッカーしたいなあ。クラスの仕事、終わるんか。まあでも、断ることもできへんなあ。これが、本音である。でも、「行きます。」と言った以上、行かないわけにはいかない。

朝は実家の松原市から自転車で45分かけて出勤、夜は60分かけて天王寺の会議室（クレオ大阪中央が中心）へ、そして、帰宅、という1日だった。

しかも、隙だらけの当時の僕にとっては仕事が全く終わらないのだから、夜7時ごろに学校を出て、夜8時ごろに会議室へ着き、本を開いては眠りに落ち、自分の番が来たら音読という具合。音読しながら寝落ちしたこともあった。それでも、当時は毎回感想文を書いていた（書かないという選択肢がなかった）ので、いざ感想文を書くとなれば、中村原稿の気になったところを書き出し、そのほ

とんどが引用という、視写みたいな感想文だった。

それが良かったのか、2年、3年と続けているうちに、「このタイトルなら、こんな感じのことを中村さんは書くんじゃないか」と予想しながら読むようになり、睡眠学習の時間も少なくなった。そうして、僕は、いろいろな本が読めるようになってきた。後に衝撃を受けることになる関西勤労者教育協会の石川康宏さん（経済学者、神戸女学院大学）には、講演会の中で「本に赤線を引いて読むとよい」と教えてもらったことを覚えている。

大阪支部の皆さんは、仲間と励まし合いながら、こういう教師人生をずっと続けてきたんだろうなと、少し分かるようになってきた。

競技サッカーは諦めきれずにいたが、教師人生も悪くないなと思い始めていた。

2. 僕が体育同志会大阪支部へ片足を突っ込んだ日々

2010年—いろいろなことがあった年だ。年末には結婚をした。この年の夏休みは多忙を極めた。

8月の末に中河内地区小学校教育課程研究協議会という官制研修会での国語分科会の報告が当たっており、前年の研究主任が放置状態だったため、全職員暗黙了解で僕が引き受けることになった。4月からの2ヶ月で文献を読み漁り、学校内の「物語文指導の教育課程試案」を作成。職場の了解を得た。7月初旬には、これまた僕が研究授業も行い、その様子も交えて報告した。物語について少し深く考える機会を得て、今となってはいい経験だったと思う。

8月初旬の土曜日からは、全国研究（京都）大会のサッカー分科会で、実践報告もした。「新人4年目もじゃまじゃまサッカー～作戦・戦術づくりに向けて、じゃまじゃまサッカーで『コート認識』を育てたい～」という報告だった。ゴールを真ん中に置いたり端っこに置いたりして、コート上にできる空間に変化が出るかどうか、それを小学2年生の

子どもたちが発見できるかどうかを実験した。今から思うと発達を無視した、ダメな実験的実践だったが、今となっては勢いに任せたい経験になったと思う。

その3日前には、大阪支部大会が中河内で行われた。土曜日曜は各職場の林間学習や親睦旅行で参加が難しいということで、前年の大阪市内大会を踏襲して思い切って平日開催に踏み切った。会場は、一年前に国分小学校で決まっていた。「日名さんが実行委員長をせなあかんやろ」と黒井さんの強い押しで、「僕でいいんだろうか？」と思ったものの、あっさり引き受けてしまった。また、前田さんが、「府教委の後援をとったら、市教委の後援も取れる。そしたら、出張で参加できる。」と言われ、初めて後援申請のために年休を取り、府教委へ直接手続きに行った。お陰で柏原市教委、八尾市教委、そして府教委の後援申請を取ることができた。また、記念講演には、ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英さんにオファーを出したが、丁寧なお断りをいただいた。

年が明けた2010年11月に、勤労協の新春講演会に初めて参加し、石川康宏さんを初めて知った。「財界、政治家、大手メディアの三者結託。これが、世の中を多く占める私たち労働者にとっての大敵なんだ。財界が政治家に献金を送り、政治家が上手く国民を騙して財界有利な減税制度などを後押しする法律を作り、行政を行う。そして、真実を大手メディアが巧妙に差し止め、国民を無知なままに留めておく。大手メディアにも財界がスポンサー料を支払う。国民は忙しく働かせて休日は娯楽に向かわせ、政治批判が起らないように仕向ける。こういう買収や栓抜きによる国民奴隷化が、現代日本で行われていることなんだ。」といった内容だった。

一気に目が覚めた。そして、支部大会の記念講演は石川さんに決まり、支部大会は久しぶりの3桁参加で大成功をおさめた。

閉会式では、大会画像を編集した映像を、大会速報作成の合間を縫って必死で用意した。いざ、放映すべくプロジェクターにパソコンを繋いだのだが、投影されないアクシデ

ントが起こった。モジモジし、諦めかけた頃、窪田浩尚さんが走ってきて、何やら設定をいじりはじめ、見事、映像がスクリーンに映し出された。感無量だった。そして、また一つ、パソコン操作を覚えた。

同志会新年度の9月からは、体育同志会大阪支部の研究部長を指名された。安武さんが2年、片本さんが2年、研究局長を務められ、お2人からも多大な学びと重要な示唆をいただいた。

怒涛の一年だったが、今思うとその疲れもあったのだろう、新年のハワイでの新婚旅行では、はしゃいだ一日目の半袖スタイルがまぶしかったのか、夜には両腕がムズムズし、翌日からはみるみる腕が腫れ始め、3日目にはホテル近くの病院でお尻に注射され、帰国してからも病院で診てもらった。両腕は曲がらないほど腫れ上がり、「日光によるやけど」と診断された。始業式と翌日は年休を取り、土日を迎える頃ようやく両腕が痒くなって快方に向かった。「冬休みが4日増えた」と前向きに考えるあたりも大阪支部の楽観性から学んだ。しかし当時、競技サッカーへの諦めは、まだつけられずにいた。

3. 僕が、同志会大阪支部へ両足をつっ込んだ日々

2011年—怒涛の一年の後、支部大会（中河内）を終え、初めての算数少人数を担当させられ、翌年に隣の玉手小学校へ転勤した。ここで、大変不本意な6年間を過ごすことになる。

転勤初日、校務分掌の健康教育部の会合で、長が一向に決まらず、数十秒の沈黙を破って、「僕で良ければ」と手を挙げた。今思うと、なんて職場だという感じだが、当時の僕は若い勢いであろう、手を挙げた。「頼まれてもないのに、自ら進んで手を挙げるな」という職場政治を学んだ。今思うと、これもいい経験になった。

その後の5年間は、学級担任を外された。あまりの理不尽な処遇に、職場との人間関係をほとんど絶った。周りの職員には、不貞腐

れたように見えていただろう。しかし、僕の中ではそれでも教育研究への情熱は冷めていなかった。むしろ、ますます拍車がかかった。同志会大阪支部のおかげだ。

一時は7、8人が常に参加していた中村敏雄著作集輪読会には、前田さんと牧野さんと安武さんと僕の4人になっていた。この輪読会が、僕を支えていたのだと思う。

気がつけば、戦略の科学性と一貫性を保てない高校OBの社会人サッカーチームに別れを告げ、いよいよ、同志会大阪支部に両足を突っ込むこととなった。

「同志会の60周年大会は、大阪しかない。」と前田さんが言った。同志会50周年の大会が2005年に奈良女子大学で行われたが、当時の僕は大学4回生で、小学校から兄の後ろを追いかけ始めたサッカーを諦めきれずにいた。秋葉英則（児童心理学）の末弟であることが、後の同志会との接点の序章であったのかもしれないと今更ながら思うのだが、悩んだ末、諦めきれずにプロの道を目指すことで吹っ切れたあの熱い夏に、こんな教育研究団体があることも、こんな先生方がいることも、そこにこれほどの歴史があることも、知る由がなかった。

2013年—12月から発足した、同志会60周年全国研究（みのお）大会の実行委員会（辻内委員長）では、企画局長に指名された。「若い人だけで、何かやってほしい。」とのことだった。朝輝さん、市川さん、梅山さん、川渕さん、下村さん、菅さん、宮本さん、後々、幼年プロジェクトの塩田さんを皮切りに岡田（神原）祐子さん、高田さんという20代・30代の若い面々が企画局へ集まった。ラインアプリもない当時、メールで連絡を取り合い、「大阪学」（大谷晃一、新潮文庫、1996年）を基調として「せっかちでしたたかな大阪らしさ」を追求した。

大会1ヶ月前になってようやく「同志会ある時ない時シリーズ」の漫才に落ち着いた。ネタ合わせはオープニング直前まで続いたが、それも今となってはいい経験だったと

思う。なんとかなるものだ。こういう経験が、「激論の末、最終的には、子どもたちに任せ切る」実践姿勢に乗り移るのだろう。

山本敦子さんと大会テーマ曲「新しい風」を作成したことも、忘れられない。たたき台は日名が作ったのだが、修正を山本さんにいただいた。「わずかな修正で、こんなにもクオリティーが高まるのか」との感動は、今でも忘れられない。「日常にわずかな変化を加えることで、学び生きる楽しさと喜びを」という偉大な教訓には、毎日その日暮らしの教育実践にも使える絶大なスパイスを授けていただいたように思っている。瀬見さんのエンタメ力もすごい。ギターと歌唱力であっという間に世界を作ってしまう。こんな力を手にしたいと思わされた。

記念講演も企画局が担当した。大教組青年部主催の青年フェスタで「宮崎駿さんと呼ぼうと動いた」という情報を得て、こちらもそれで進めてみることにした。宮崎駿さんの著書を5冊くらい買って、そのうち2冊ほど読んで、時間がなくなったので「えいやっ！」と講演依頼文を作成した。B5で8枚くらいになった。これには、あの安武さんも「同志会必読文書だ！」と言ってくれた。でも、嬉しいという気持ちは少ししかなかった。両足を同志会大阪支部へ突っ込んでいたからだろう。内容が逸れていなくて良かった、これでいける、というのが正直なところだ。「宮崎は、目の衰えを感じており、少しでも制作に時間をかけたいと申しております。」（意識）とジブリから丁重な断りが返ってきた。

落胆の直前、愛知支部の成瀬徹さんから、愛知の高校の組合の大会でジブリの高畑勲さんを講演で呼んだことを教えてもらった。2014年3月末の「中村敏雄シンポジウム」後の、囲炉裏場での食事雑談の中だった。

宮崎ショック後すぐ、高畑勲さんの著書を3冊ほど購入し、1冊は完読して、講演依頼文を修正し、2ヶ月後にジブリへ送った。別案を備えておくことによる切り替えの速さが身に付いてきた。

返事は2ヶ月後にいただいた。「毎日忙しいスケジュールをこなしていて、また歳のこ

ともあり、次の年のスケジュールは組めない事情にあるが、これは受けようという言葉聞いております。」（意識）との返信。

職場では不遇の連続であったが、こういう日々を支えられていたのであろうと思う。

2015年—結局、年が明けての1月、高畑勲さんの健康問題を理由に約束が果たされることは無くなった。その年8月の東京での全国保育問題研究協議会大会の講演者が高畑勲さんだったことを、後から塩田さんに教えてもらった記憶がある。体調優れぬ中、近場での講演をお受けになられたのだろうと推察する。

記念講演は推進講座でオリンピック問題をお話いただいた森川貞夫さん（スポーツ社会学）にお引き受けいただいたのだが、

「私は昨日、終了後、大貫先生の若い方々と途中まで一緒だったのですが、かれらも大阪のエネルギーと、あの吉本興業顔負けの「企画」「演技」等々に圧倒されたようです。この1年足らずの大阪支部とのお付き合いですが、東京にはない明るさと自由さ、しなやかさを感じることができました。」

とのメッセージをいただいたことは、大変嬉しく感じた記憶がある。

その後も、職場での不遇は続くが、よく理解していただいた同僚にも出会った。人生悪いことばかりではない、という貴重な経験をいただいた。

2017年—大会2年後、校長のパワハラを府教委へ告発し、無事と言っていたらどうか、その甲斐あってか、今の堅下小学校へ転勤した。そこでも、学級担任外を二年経験したが、堅下小学校2年目に、転機が訪れた。初任時代から公私共にお世話になった先生が校長としてやってきた。前田さんとも懇意にされている方で、同志会のよき理解者でもあった。

そして、9月からは臨時で2年生の学級担任に指名いただいた。元担任の復帰により3ヶ月で学級担任は終わったが、翌年は、3年生の学級担任に指名いただいた。大変な学年

ではあるが、また、新型コロナウイルスの影響を受けたが、これまでの経験と学びをフル稼働させた。何森さんに昔教えていただいたアドラー心理学の「クラスはよみがえる：学校教育に生かすアドラー心理学」（野田俊作・萩昌子、創元社、1989年）で得た知見が多いに役立った。体育ではできる限り、隣のクラスとのバランスも取るように心がけた。夏には、上野山さんの先行実践にレールを敷いていただいて、僕の中では初めての「対話による健康教育実践」として新型コロナ実践に取り組んだ。資料作成の時には、窪田さんのこれまでの健康教育実践の資料のイメージに大いに後押しを受けた。

2021年—今年を持ち上がりで4年生の学級担任となり、充実した4月を終えた。

組合でも書記長をせざるを得なくなっていた。同志会大阪支部の事務局長を4年前に佐々木盛文さんから引き継いで、回り始めたことを実感したこの2月、柏教組書記長引き受けを決意。毎週ある執行委員会のレジュメはその日の会議終わりには次のものを作成してプリントアウトしている。執行委員会は夜6時からの一時間と取り決めて、遅くとも夜8時には事務所を後にしている。月二回発行の組合機関誌もB4一枚表裏のプロットを毎回検討し、ほとんど原稿を役員へ振っている。

段取りの全てを、この同志会大阪支部で学び取った。

校務分掌では、PTA担当、学力担当のため、この4月は大変な忙しさで、学級のことも学年のことも半分も手をつけられていない。PTA学級委員選挙の名簿を全学級分作成した。これも、同志会で学んだエクセル技術が生きている。

こんな日々を、過度な心配やストレスも少なくそれなりに楽しく送ることができている。今後、教師人生がまだ20年以上続くだろう。本当に、同志会大阪支部には感謝している。僕の教師技量の全てをいただいたと言っても過言ではない。

「ここにいることが、大事」と中村敏雄が言ったそうだ。この言葉をはじめ、中川孝子さんからもたくさんの教えをいただいた。

今や、「競技サッカー」の諦めが、いい選択だったと思えるようになっている。

4. 今後の大阪支部への提言

年後の大阪支部への提言をここにまとめておきたい。提言は、本誌に掲載されている「若者座談会」で挙げられたものなので、決して日名の独創的なものではない。

(1) 球技指導研究

結局、大会となるとうまい子ばかりが活躍の場となってしまふ。

(2) 子ども理解（発達研究も含め）

0歳にもその子らしい「達成感」がある。大人がそれをどう感じ取るかが大切だ。「発達にあっていない教材だと、子どもたちも乗ってこない」という声にも大きく関わる。

(3) 新しい教材開発

健康教育は社会問題と関わるので新しい時宜にかなった教材開発が行われやすい。他分野でもその必要性を感じる。

(4) インクルーシブ体育

支援学級の子ども、特に重度の子どもがいる中での授業の工夫。

(5) 大規模校での体育実践

場所の割り当てに大きな制限があり、特に「習熟」という点で大きな課題が浮き彫りとなる。合同体育をうまく利用しながらの同志会実践広がりへの機会とするための工夫。

(6) 学校づくり

梅山さんの「マラソン大会からペースランニング学習参観」実践のように、中長期的な視点での同僚性を大切にしたい、学年、学校内、保護者理解と3年ほどで徐々に広がる学校づくりへ。

(7) 健康教育に広がり

性教協（”人間と性”教育研究協議会）の実践にも学び、科学的なこれまでの同志会らしい健康教育実践に、LGBTをはじめ様々な社会問題もより網羅したSDGs（持続可能な開発目標）などの視点も取り入れた性教育実践の深まり。

(8) 接続連携

幼小の交流が再び進み始めた。今後は関大を中心として中高の先生の参加も期待できる。発達研究とも関わる大きなテーマになるだろう。

(9) 現教材の整理と簡略版の開発

「組体操の代わりにこれ！」といった行事と関連させた現教材の整理による職場への分かりやすい提示や、現教材の簡略版開発によって同志会実践の入口を大きくする。ここから、学校づくりへと繋ぎやすいのではないだろうか。体育は教科書がないので、先生方のニーズは大きいはず！

(10) 継続的な「座談会」

短時間で、継続的に会員の「願い」を汲み取る機会を作って欲しい。オンラインなども取り入れながら、会場への往復が難しい人も気軽に参加できるように。

(11) 地域づくり

「社会継承・発展・変革・創造の主体者形成」が最大目標の同志会にあって、一番遠く、まだまだ志半ばにも至っていない分野だろう。これは、日名の考える《勝手企画（案）》を一案とされたい。これについては機会があれば、何よりご興味ある方があれば、日の目を見るだろうと思う。

5. おわりに

気がつけば、123名の大阪支部会員（2021年5月23日現在）の70%以上が20代～40代となっている。これは、そこを目指してやってきたからではなく、一日一

日、真摯に、必要を感じた会員一人ひとりが、多忙な中でもめげずに集団検討を繰り返して教育実践に向き合ってきたからだろう。その、貴重な一日一日の尊い結果である。

辻内さんの牽引する編集局が、その日々の取り組みの存在を大阪支部ニュースとして顕在化させて下さっている。非常に、尊い仕事だと思う。

そして、「研究」団体であることの意味を堅持し続けるべく、研究部長の楠橋佐利さんが多忙な毎日をやりくりして支部研究を牽引されている。「やっぱり、文献に学び、集団論議して、教育実践を創り続けなければ」という同志会大阪支部の原点を示し続けて下さっている。

現大阪支部長であり、半世紀という大きな節目の支部50周年記念行事実行委員長の佐々木さんは、「民間教育研究サークル冬の時代」を今につなぎ、多数の教育実践を残されてきた。事務局長時代は多くの業務を整理し、役割分担制を確立され、こんな僕でもそのおかげでなんとかこの大阪支部の事務局を回すことができている。

こうして、この2021年6月、創設半世紀の同志会大阪支部は何度目かの「初夏」を迎えている。

この熱い火は、この世に民主主義がある限り、消えることがないだろうと思う。

この尊い日々、終わりが来ることはないだろうと思う。

50年後も、この組織のあり様を変えてはいけない。半世紀後は、支部創設一世紀だ。

一人ひとりが、大切な、掛け替えの無い物語を背負った自分の人生の主人公であり、だからこそ、そんな自分の力が発揮できる尊い仲間とともに各ブロックや各プロジェクトを創っていく。結果として、支部組織が確立されていくことが、いつの時代も大阪支部らしさなのだと思う。